

学術情報流通に関する連続セミナー 第15回

---

## 研究評価から考える研究の価値

### — 研究評価改革と京都大学 COMONの試み

佐々木結  
京都大学総合研究推進本部

2026年10月16日

※本報告に含まれる見解・解釈は報告者  
個人のものであり、所属組織の公式見解  
を示すものではありません。

# 本日のお話

---

01 数値指標と研究の価値

---

02 研究評価改革の変遷と現状

---

03 大学での試み： 京都大学COMONの事例

---

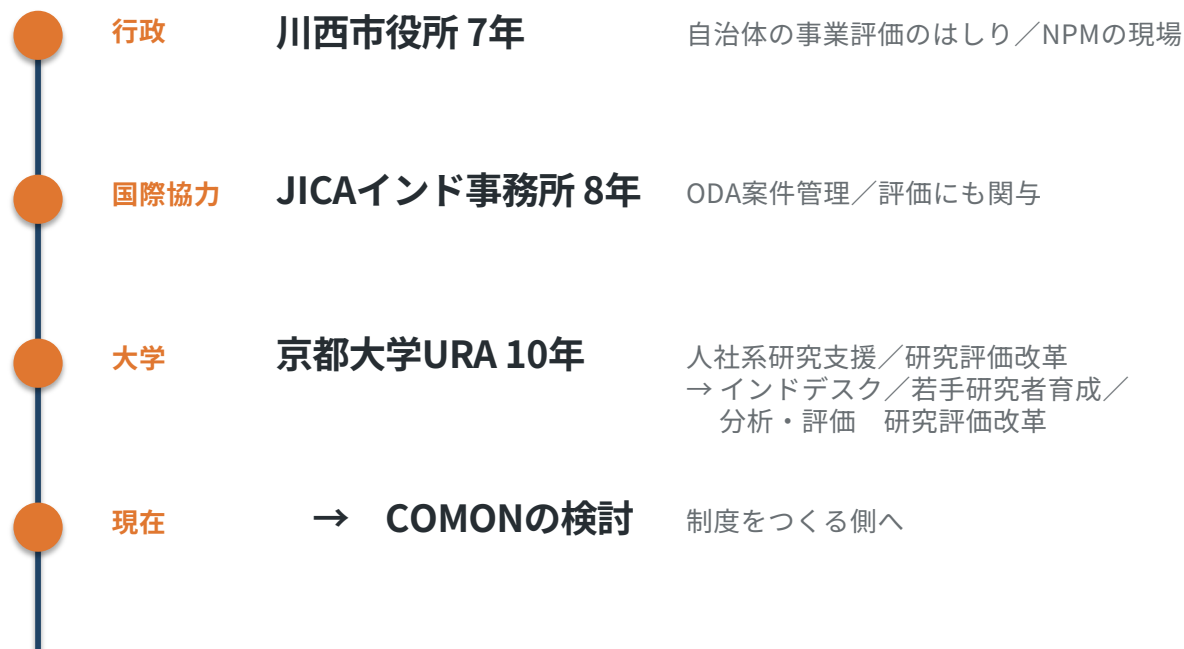
04 これからの課題・未来に向けて

---

# 自己紹介：評価する・される側から、研究支援・研究評価改革へ

佐々木 結 | 京都大学 総合研究推進本部（KURA）リサーチ・アドミニストレーター

政治学・地域研究・開発学／インド研究  
大阪外国語大学 → 東京外国語大学・ロンドン大学SOAS → 神戸大学



## 評価する側・評価される側

その非対称性に、十分自覚的  
だっただろうか。

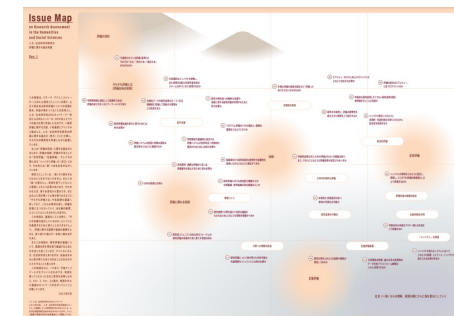
評価対象、方法論だけでなく、評価  
の仕組みそのものも問い直す必要

この問題意識が、研究評価改革と  
COMONの設計に関わる一つの出発点に

# URAの同僚たちと、研究評価を考えてきた歩み

人文・社会科学の評価課題から出発し、RRAの国際的議論と接続しながら、日本の大学でどう実践するか、学内外のURA・研究者・専門職との共同作業として考えてきました。

|         |                                                          |                                                                                                                               |
|---------|----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2017    | RESSH                                                    | KURA内の読書会参加から<br>‘The Quest for ‘Research Quality’ in the Social Sciences and Humanities : A Japanese perspective’            |
| 2018    | 第4回人文・社会科学系研究推進フォーラム                                     | 「人文・社会科学系研究の未来像を描くー研究の発展につながる評価とは」                                                                                            |
| 2019    | 第7回JINSHA情報共有会                                           | 「研究の発展につながる評価とは～「責任ある研究評価・測定 (Responsible Metrics)」とURAにできること～」                                                               |
| 2020    | RU11 (DORA署名を検討)                                         | RU11としての署名を検討する場で東京大学新澤さんと話題提供<br>→ 2023年に東大DORA署名へ                                                                           |
| 2021    | 第9回JINSHA情報共有会<br>INORMS 2020<br>日本学術会議 研究評価分科会          | 「責任ある研究評価を考える ー大学・研究機関にとっての責任ある研究評価とはー」<br>‘Responsible Metrics and Multilingualism: A review of evolving Asian perspectives’ |
| 2021-22 | DORA Community Grant                                     | 提言「学術の振興に寄与する研究評価を目指して<br>～望ましい研究評価に向けた課題と展望～」協力<br>「人文・社会科学系研究の評価に関する論点地図 Ver.1」 with DORA Community Grant                   |
| 2023-   | C4RAでの勉強会<br>京大IRセミナーシリーズ：                               | IR系同僚との共同、学外でも関心高まる<br>→「京都大学で「責任ある研究評価」を考える」                                                                                 |
| 2024-   | 京都大学セミナー「多様性と持続可能性：<br>責任ある研究評価と大学改革の課題」開催<br>→ COMON検討へ | 大学の制度設計・実装へ                                                                                                                   |



→2025  
RA協議会第11回年次大会「REFから読み解く人社系  
分野別研究業績の特徴と日本の人社系研究成果可視化  
に向けた課題の検討」中野悦子さん代表（現東北大）

視野を広げると、人社系だけの問題でも、日本だけの問題でもなかった。 → 日本の大学で何が実践できるのか

## 第12回・三浦さんのセミナーから

# アカデミックコミュニティは何を後世に残したいのか。

Peer review  
Citation  
Attention  
Trust

- 出版過多の状況では、学術情報基盤を整備し、公開するだけでは学術情報の「流通」は保証されない。限られた attention と trust がどこに向けられるかが、いっそう重要になる。
- ピアレビューや引用は、研究を単に観察するだけでなく、どの知識にattention・trust・resourcesを配分するかに関わっており、その判断が、未来の研究を形作っていく。

何が発見され、読まれ、信頼され、次の知識につながるのか。  
そこには、学術コミュニティの価値判断が関わっている。  
プレプリントに限らず、どういう媒体であっても、根幹にあるのは  
アカデミックコミュニティが**何を価値と認めるか**ということであり、  
そこには純粋な価値だけでない問題が多く潜む。

では、アカデミックコミュニティは何を後世に残したいのか。

# 学術情報流通と研究評価は、相互に形づくり合う

## Scholarly publishing

何が *visible / accessible* になるか

Metrics  
指標

## Research assessment

何が *valued / rewarded* されるか

From  
interdependent  
movements to  
shared action:  
Connecting  
publishing and  
assessment  
reforms

September 2026

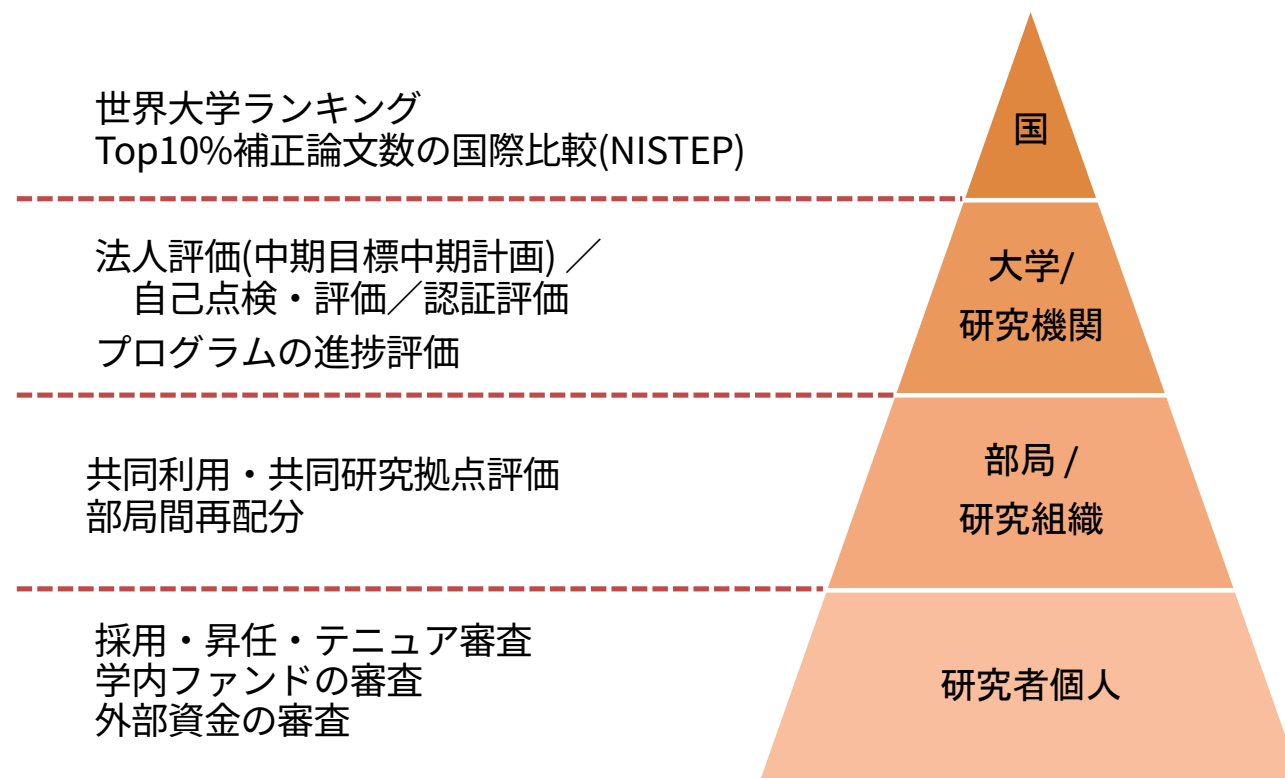
- 評価が出版のあり方を形作る一方で、出版インフラや慣行は、何が評価の対象となり、評価されるかを決定づける。(p.4)
- 研究者の出版活動は、多くの場合、研究者が直面している評価の在り方にかなり大きな影響を受けて形作られている(p.8)

→ 別々の流れとして存在していた両者を、同時に変換させていくことを目指した実践へ

Waltman, L., Lima, G., Corker, K. S., Dijkstal, F., Lawrence, R., Albacete, J. L., Barbour, G., Boulton, G., Brasil, A., Dube, N., Gadd, E., Hatch, A., Hill, M., Joseph, H., Kiermer, V., Koley, M., Lynott, D., Murray, S., Naidorf, J., Polonen, J., Pattinson, D., Puebla, I., Ratan, K., Rieck, K., & Shawrav, M. (2026). From interdependent movements to shared action: Connecting publishing and assessment reforms. <https://doi.org/10.5281/zenodo.22133868>

# 1. 数値指標と研究の価値

# 大学における研究評価の数々



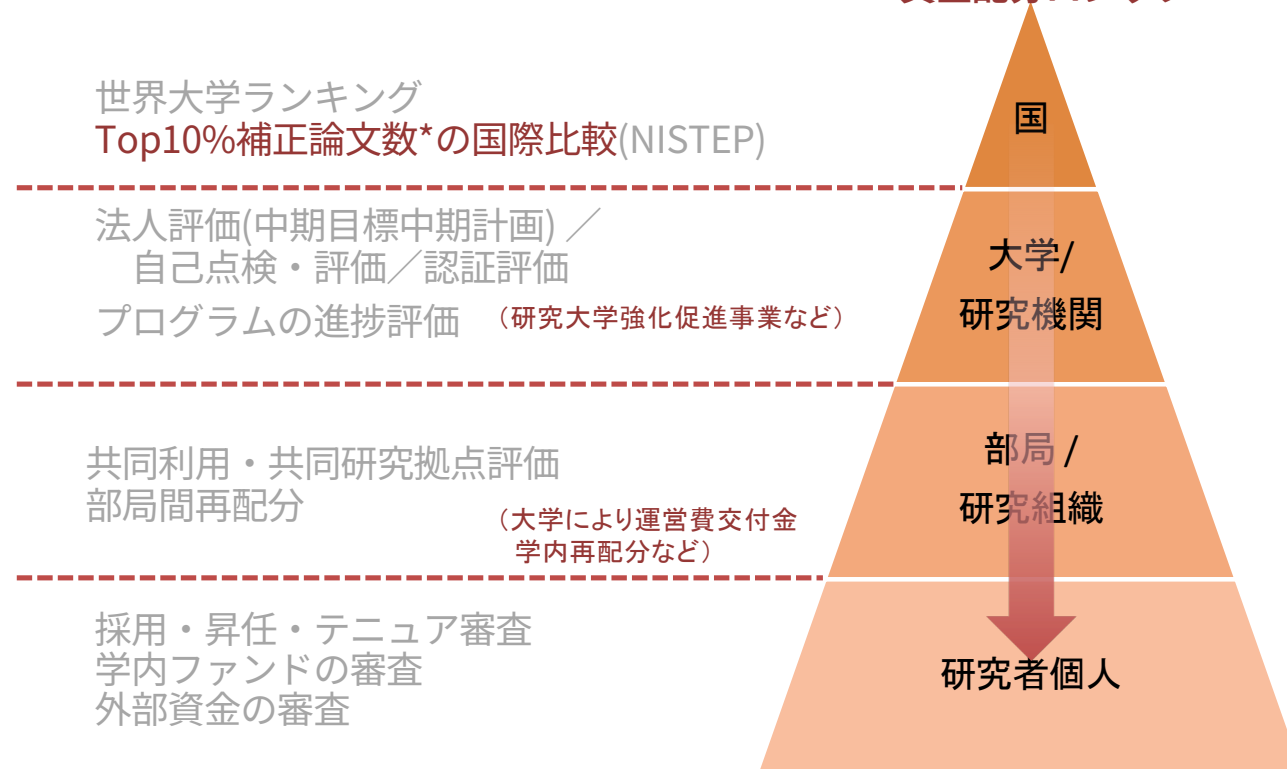
# たとえば、Top10%補正論文数 文脈や目的が異なる場面で使われると…

## ■ Top10%補正論文数\* (NISTEP)

論文の被引用数（前年末の値）が各年各分野（22分野）の上位10%に入る論文数。

\*科学技術・学術政策研究所 科学技術予測・政策基盤調査研究センター, n.d., 科学技術指標2026: 科学技術・学術政策研究所.

### KPI・評価基準 資金配分ロジック



- 指標は中立ではなく、組織から個々の研究者まで、さまざまなレベルで行動を方向づける。
- 分野により位置付けが異なる指標が、分野を問わず利用され、行動が方向付けられると、どうなるという影響があるだろうか。

# 指標が研究の方向を変えうる事例：インド

## インドの保健関連研究と保健ニーズ＝社会課題のずれ

- Kumar et. al. (2024) は、疾病負荷（DALYs）と、その疾病に向けられた研究努力（論文数）を比較。インドの場合その不一致が、高所得国だけでなく、中国、ブラジルと比較しても大きいという結果に。
- がんやアルツハイマー病など、高所得国に関心が高く、国際ジャーナルで注目を得やすい領域に研究が集まりやすい傾向を指摘。
- 一方、インドで実際に深刻な疾病と認識されている新生児疾患や下痢症疾患など現実の社会課題解決に対し研究努力が向きにくいというずれが生じている。

### インドにおける 疾病負荷 ⇄ 研究論文

| がん                  | 新生児疾患               |
|---------------------|---------------------|
| 疾病負荷 <5%<br>論文 約22% | 疾病負荷 約14%<br>論文 約2% |

## なぜ、こうしたずれが生まれるのか

著者らは、国際共同研究や研究資金の機会、ひいてはグローバル・国内大学ランキングも、研究者の選択の方向づけに影響すると指摘。「**国際的に評価される研究**」と「**その社会で必要とされる研究**」は、必ずしも一致しない

評価指標は、研究の価値を「測る」だけでなく、  
何が研究され、何が研究されないかに影響を与える

# 何度も測られるものは、やがて「目指すべきもの」にすり替わる

「監査文化（Audit Culture）」は、外部の評価基準への「対応」に過ぎなかったものが、次第に組織や研究者自身の規律へと内面化されていく過程を捉え、「価値のすり替え（Value Capture）」はそれが価値判断に置き換わることを意味を明示する



「監査文化とは、財務会計の原則、手法、および理論の根拠が、社会の組織化のあり方において支配的な特徴となっている状況を指す。」  
(Shore & Wright, 2024, p.4)

監査文化は単なるガバナンスの仕組みではなく、影響力を及ぼす力となりうるもの。説明責任という概念は、「内面化された自己規律」へ変わり、研究者は評価される主体として自らを整え、それが専門分野における価値判断にも影響することに。

Value capture（価値のすり替え）とは、指標のような外部から与えられた価値基準が、そのまま私たちの実践的な判断を支配してしまうこと——つまり、ランキングを上げること、被引用数を増やすこと、「いいね」を多く得ること自体が、いつの間にか目標になってしまうこと（Nguyen, 2024, p.473）

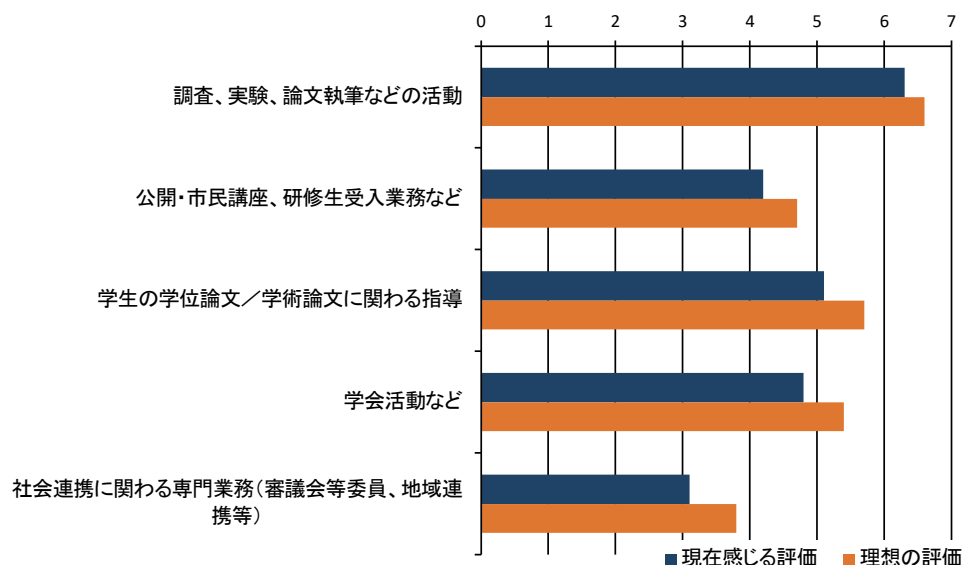
その代償は、自分の価値を自分自身の文脈（自分の個性や独特の文化や世界の特定の片隅）に合わせて調整する過程を諦めること（p.471）

その指標に代表される価値は、大切に残したい価値と言えるだろうか

# 研究者自身が大切にしたいものは、一つではない

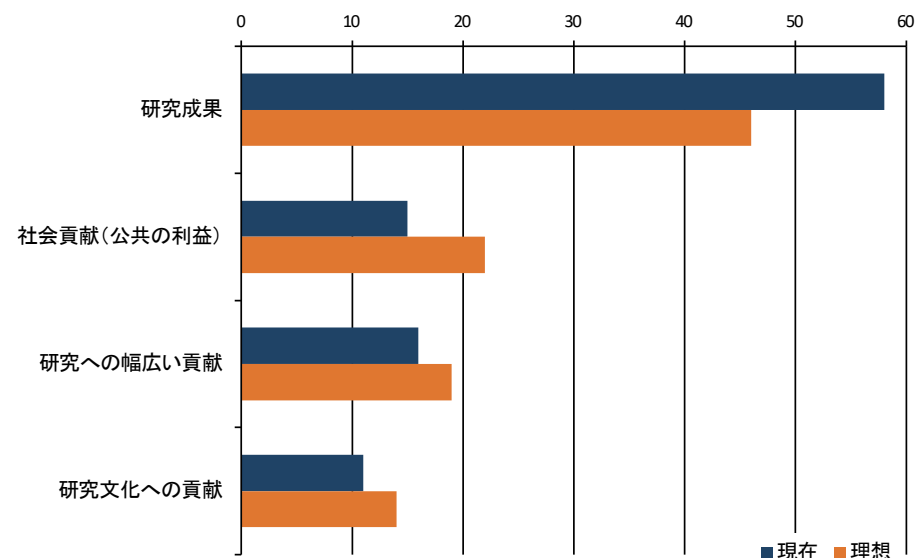
日本の若手研究者調査と Nature / Springer Nature の国際調査

## 日本学術会議 若手アカデミー調査 2022



日本の調査では、研究の中核である「調査、実験、論文執筆などの活動」も、現状以上に評価されるべきだと考えられている。

## Springer Nature調査 2024



Springer Natureの調査では研究成果の比重を下げ、社会貢献・幅広い研究貢献・研究文化への貢献を高めたいという傾向が示される。

**研究者は「評価されたくない」のではない  
研究成果を軽視したいのでもない。研究という営みを、より広く捉えてほしい。**

出典：日本学術会議 若手アカデミー (2023). 『2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題』 p.35図k「現在受けていると感じている評価と理想の評価」(調査実施は2022年) 及びSpringer Nature (2025, April). The state of research assessment: Researcher perspectives on evaluation practices. <https://stories.springernature.com/state-of-research-assessment> (調査実施は2024年) より筆者構成

## ここまでのまとめ

---

- 1 | 研究評価は、すでに存在する価値を測定するだけでなく、研究者の行動を方向づける効果を持つ
- 2 | 評価基準は研究者自身の価値判断にも内面化され、気付かないうちにTop10%論文を出すこと自体が、価値のあることだと思い込みがち
- 3 | 評価自体には肯定的でも、研究活動をより広く評価してほしいという声も

→ 評価基準（指標）の選択は、何に価値を置くかという研究文化の選択

## **2. 研究評価改革の変遷と現状**

# 研究評価改革の流れ：英国・オランダから、多国間の改革、そして大学の実践へ

研究評価改革は、国別制度への批判的検証・見直しから始まり、原則を共有する国際的な運動へ、さらに研究文化を変える制度実装へ広がってきた。

1980s-2000s

## 英国・オランダが牽引

英国RAE/REF、オランダSEPなど研究評価制度の整備により、定量化・制度化が進む一方、評価が研究をどう変えるかが課題に。

2012-2022

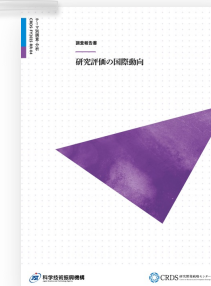
## 原則が国境を越える

DORA (2012)／Leiden Manifesto (2015)／The Metric Tide (2015)／CoARA Agreement (2022)。  
JIFの見直し、社会的インパクト、「責任ある指標」から研究評価全体の改革へ。

2019-現在

## 人・研究文化・環境へ

オランダのRoom for Everyone's Talent、SEP、北欧・フランダースの大学実践。  
キャリア、人材育成、研究環境、対話と形成的評価が前面に。



JST-CRDS  
「研究評価の国際動向」  
を参照

NPM: 定量測定・評価方法開発 → 定量評価の見直し 社会的インパクト → 人と研究文化重視・オープンかつ多様な評価軸 → 変革加速のため国際・異業種実践的連合へ

研究評価制度が浸透するにつれ、課題が浮上

- 評価サイクルに合わせた短期的成果優先
- 論文の粗製乱造による質の低下
- 評価軸に合わせ分野内で近似化

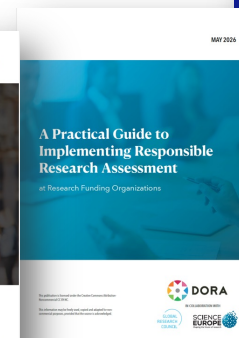
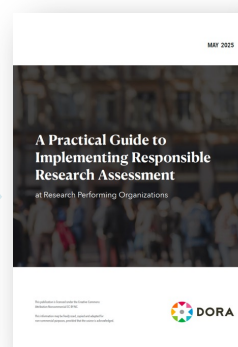
といった学術上の課題だけでなく…

- 序列化が進み、過度に競争的なキャリア構造に
- 燃え尽き症候群・いじめ
- 研究不正行為

など、職場環境やアカデミアのあり方自体が問われることに

点の宣言 → 面的な連合 → 組織文化の実装

数値による一元的定量的評価から、**人と研究文化を重視し、より多様で、形成的、ナラティブな評価をも含む方向へ**



From interdependent movements to shared action: Connecting publishing and assessment reforms

参照：科学技術振興機構研究開発戦略センター (2026). 『研究評価の国際動向』 (CRDS-FY2025-RR-04) . 国立研究開発法人科学技術振興機構. <https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2025/RR/CRDS-FY2025-RR-04.pdf>

# 責任ある研究評価ー「よりよく測る」だけではない

責任ある研究評価（Responsible Research Assessment）とは、多様で包摂的な研究文化を支援するため、質の高い研究の多様な特性を奨励・反映・報奨する 評価アプローチを指す包括的な考え方。

## DORA

研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）（2013年）



ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）の限界を指摘。JIFを個人の業績評価の代替指標として使わないこと、掲載されている雑誌名ではなく、その論文の科学的な内容こそを評価し、また、多様な研究成果の価値とインパクトを評価することを勧告。

2018年以降世界的にキャンペーンを展開し、現在も実践的な取り組みを行う機関や個人をつなぐネットワークとして機能。

## Leiden Manifesto

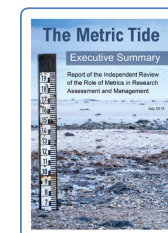
研究計量に関するライデン声明（2015年）



定量的評価は定性的評価の支援的利用、英語以外の言語による優れた地域的研究の保護、分野による引用慣行の違いへの配慮、不要な精緻化を避けるなど10の原則を提唱

## The Metric Tide

メトリック・タイド報告書（2015年）



英国の研究評価システム（Research Excellence Framework（REF））への指標利用の有効性を検討。指標の効用も認めつつそれだけに依存することの危険性を指摘。結論に代えて、頑健性、謙虚さ、透明性、多様性、省察性という5つの原則からなるResponsible Metricsという概念を提唱。

2021年に出版された続編、Harnessing Metric Tideでは、DORA（研究評価に関するサンフランシスコ宣言）やCoARA（研究評価改革の推進のための有志連合）などの国際枠組みとの連携強調。

## 研究評価改革の推進のための有志連合(CoARA)

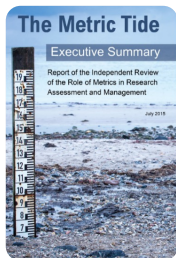
欧州主要資金配分機関、研究機関などが研究評価改革を加速するために合意文書に署名し、連合体を組織。2022年7月、研究機関、資金配分機関、各国の評価機関、学会、大学連合など関係機関が署名できる欧州の合意文書を発表。2026年10月1日現在、800以上の機関が署名。欧州を中心としたグローバルな合意形成により、研究評価改革にかかる連合（Coalition）を作り、具体的な実施計画により、責任ある研究評価への改革をより速く効果的かつ一気に実現することを目指す。

# 研究評価改革例：イギリス

- 1980年代から研究評価制度（REF）に改善を加えつつ、7-8年に一度、分野別ピアレビューにより大学ごとに評価し、結果に基づき資金配分。

## 2015年 メトリック・タイド（指標の潮流）報告書

前文から読み取れる  
危機意識 →



...学術文化の最も貴重な特質は単純な数値化に抵抗し、**個々の指標が研究の豊かさや多様性を正当に評価することは困難**である。...2014年9月に自殺したステファン・グリム氏の悲劇的な事例は、インペリアル・カレッジが業績評価指標の使用に関する見直しを開始するきっかけとなった。

この悲劇は、これらの議論で問われているのが**単なる効果的な管理制度の設計だけではない**ことを思い知らせる衝撃的な出来事であった。**指標は真の力を秘めている**。それは価値観、アイデンティティ、生活を構成するものである。

その力をいかにして**ポジティブな結果に結びつけるか**が、本報告書の焦点である。

Wilsdon, James et al. The Metric Tide: Report of the Independent Review of the Role of Metrics in Research Assessment and Management. 2015. [https://responsiblemetrics.org/wp-content/uploads/2019/02/2015\\_metrictide.pdf](https://responsiblemetrics.org/wp-content/uploads/2019/02/2015_metrictide.pdf)

## REF2029

- REFが短期的成果を追求する傾向を促し、「研究者の過重労働や不安定な雇用、研究不正のリスクを高めるという批判」を受け、新しい評価観点 Strategy, People and Research Environment, SPRE)の配分を増やす。

戦略・人材・研究環境 (SPRE) 20%  
↑ 15%から増加

知識と理解への貢献 55%  
↑ 60%から減少

エンゲージメントとインパクト 25%

西岡 千文, 研究文化の評価 — REF 2029をめぐる人材・文化・環境の評価の試行と再編一, 情報の科学と技術, 2026, 76 巻, 3 号, p. 150-153

一方で、4割の大学が赤字という財政難に直面し、大学のビジネスモデル自体が危機に瀕しているとも

Yates, E. & Leeming, J. (2026, September 14). UK universities are on the brink — what is their greatest source of stress?. Nature. <https://doi.org/10.1038/d41586-026-02608-z>

# 研究評価改革例：オランダ

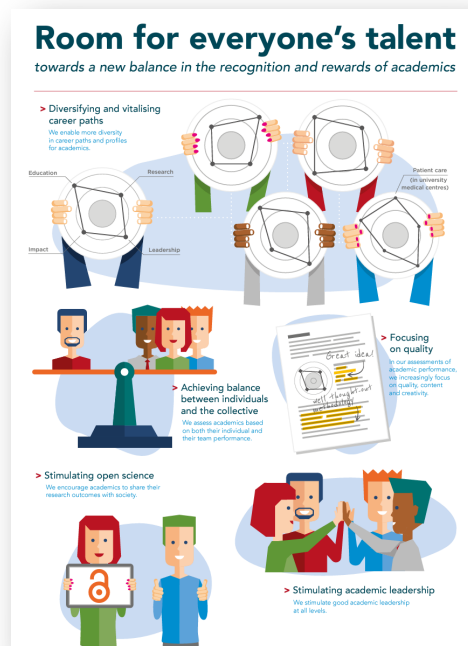
オランダでは、研究成果の多様性だけでなく、多様なキャリアを持つ研究者の多様な活動全体を評価する方向へ。

## 背景にある問題意識

**指標依存の副作用：**論文数やインパクトファクターなどの定量指標に偏重した評価は、教育・社会貢献・診療等の重要業務を過小評価し、研究者の意欲を削ぐ。

**分野間の不平平等：**学問領域ごとに成果の現れ方が異なるため、一律の指標適用は多様な研究実践を歪め、分野間のバランスを損なう。

**キャリアの多様化：**全研究者が全領域で卓越を目指す必要はない。個々の強みを生かした多様なキャリアパスと、ライフステージに応じた軌道修正を認めるべきである。



2019年『誰もが才能を発揮できる場Room for everyone's talent』という評価改善にかかる指針を発表



指針を反映した改善版評価制度。SEP2021-2027でナラティブ、形成評価、組織の戦略重視へと大きく変化。博士課程育成方針、学術文化、人材方針も評価の横断的視点として導入。最新版のSEP2027-2033もほぼそれを踏襲。

<https://recognitionrewards.nl/about/position-paper/>

<https://www.universiteitenvannederland.nl/files/publications/Strategy%20Evaluation%20Protocol%202027-2033%20v6.pdf>

# 大学自身が「研究を育てる条件」を評価し始めている

オランダの Recognition & Rewards / SEP をときに参照しつつ、それと並行して、北欧・フランダースでは大学独自の形成的な仕組みが具体化

Uppsala University  
ウプサラ大学

Quality & Renewal (Q&R24)

2007/11は成果中心 →  
2017/24はプロセス・研究条件へ

- 研究環境を単位に、強み・弱み・発展課題を自己分析
- 大学共通テーマとして「研究基盤」「学際・分野横断」を評価
- 外部レビュー＋アクションプランで改善へ

University of Helsinki  
ヘルシンキ大学

RAUH /  
Responsible Assessment

Enhancement-led assessment を明示

- 内政的自己評価を研究条件改善のツールに
- 評価対象者が設計・結果解釈・活用に関与
- 各回終了時に評価プロセス自体の成功も評価
- 前期の反省から、今期では分野横断的取り組みに焦点を当てる

University of Antwerp  
アントワープ大学

RISE

Research & Impact in a Sustainable Environment

- 研究成果そのものではなく「研究が行われる条件」を評価
- グループナラティブ＋全キャリア段階の調査＋ラウンドテーブルで全ステイクホルダーが一堂に会して議論
- 研究者・政策担当・支援職が改善策を共同形成

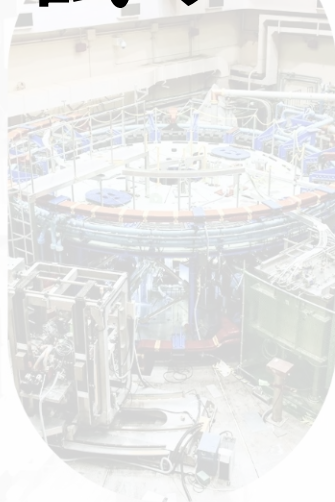
共通する方向：研究成果→研究環境の省察／外部評価→対話と学習／評価・被評価→制度の共創へ

Sources: Uppsala University Q&R24 <https://www.uu.se/en/staff/gateway/research/research-evaluations/the-research-evaluation-quality-and-renewal>  
; University of Helsinki Responsible Assessment / RAUH; <https://www.helsinki.fi/en/research/research-integrity/responsible-assessment-research-and-researchers>  
; University of Antwerp RISE: <https://www.uantwerpen.be/en/research/policy/research-evaluations/>

# COMON

対話と価値の共創による  
京都大学独自の研究評価システム

## 3. 大学での試み：京都大学COMONの事例



# COMON



## 京都大学の新しい研究評価システム（通称） coMON

- 研究組織（=デパートメント）を単位とした、対話に基づく形成的評価
- 研究組織が、研究組織内や関係者との対話に基づき自らの研究の価値と将来像を言語化し、大学との対話を通じて研究環境を改善していくための仕組み
- 研究環境整備のための資金配分を伴う

### 個人 → 研究組織へ

「独自の学問的伝統・価値・将来像を持つ主体」であるディシプリンベースで構成された研究組織が評価単位となる。

個人業績の集積としてではなく、研究組織自体の取組を評価する。

### 序列化 → 将来への対話へ

部局間比較により優劣をつけ序列化するのではなく、研究組織が、どういう研究価値を重視し、どういう将来像を目指すのかという展望を言語化し、共有。大学は、対話に基づきこれを支援する。

### 成果 → 研究環境へ

論文など研究成果だけでなく、人材育成、研究基盤、分野を超えた協働など、研究を生み出す土壌である環境を改善すること自体を目的とする。

# COMON



## 生まれた背景

2024-2025 学内セミナー／勉強会／シンポジウムでの声

「何が評価されるのか、  
どう頑張ればよいのか分からない」

単一の基準で、  
多様な学問を評価できるのか

短期的なKPIで、  
研究の将来的価値を捉えられるのか

そもそも、  
評価は何のために行うのか

評価は外から課されるものではなく、大事にされてきた価値を共有し、  
研究者や組織との関係の中で育てていくものではないか





# 位置付け



研究改革

## 3階層の戦略的な研究資源アロケーションと本学独自の評価軸

4つの観点に配慮した3階層の戦略的な研究資源アロケーションの実施により、デパートメントごとの研究力強化を促進  
本学が重視する学術的価値に基づき独自の5つの評価軸を導入し、デパートメントの研究評価を実施

### 3階層の戦略的な研究資源アロケーション



### 本学独自の5つの評価軸 coMON

- 「研究領域の特性」と「本学のミッション」に配慮した本学独自の評価軸を導入
- 本学が誇る独創的研究の価値を、汎用されている指標のみに依存せず、定性的・ナラティブな要素も含め、包括的に評価
- デパートメントは、自らの展望と戦略に基づき5つの評価軸に即して自らの強みを言語化

#### 創造的先進性 Originality

新たな分野の開拓や、国際的な卓越性が認められる研究を評価する軸

#### 波及性 Outreach Impact

異なる学術分野への展開や社会的・経済的価値の創出などのインパクトをもたらす研究を評価する軸

#### 汲取性 Network Centrality

学術ネットワークの中心を築き、社会の人々と学術を結びつける求心性を持つ研究を評価する軸

#### 伏流性 Maturing Excellence

現状では成果が可視化されていない潜在的でユニークな研究を中長期的な視点で評価する軸

#### 積層性 Cumulative Foundation

学術知の蓄積により、知を確実に継承していく研究を評価する軸

研究資源アロケーション  
において配慮すべき  
**4つの観点**

#### 研究人材の確保

- ポストドク拡充
- 若手研究者の国際公募と戦略的リクルート
- 若手研究者の自立支援

#### 研究時間の確保

- デパートメントオフィス設置
- 研究支援人材の拡充
- 教育専念教員・マネジメント教員配置
- DXの推進

#### 研究環境の整備

- コアファシリティ整備
- 研究データの共有を促進する情報基盤の整備

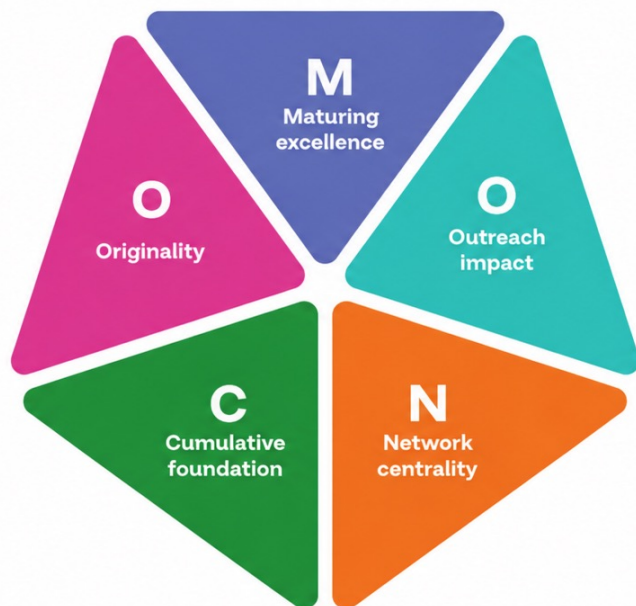
#### 研究の多様性の確保

- ジェンダーダイバーシティ実現
- 海外トップ研究者との交流
- 外国人サポート体制整備



## 5軸で表される研究の価値

- 各研究組織が、5軸を自らの文脈で定義。そのうえで、10年後どうなっているとよいか、展望を描く
- 分野ごとの多様な価値を可視化
- 研究の価値を語るための共通言語に



### 積層性

Cumulative accumulation

学術知の蓄積により、知を確実に継承していく研究を評価する軸

### 創造的先進性

Originality

新たな分野の開拓や、国際的な卓越性が認められる研究を評価する軸

### 伏流性

Maturing excellence

現状では成果が可視化されていない潜在的でユニークな研究を中長期的な視点で評価する軸

### 波及性

Outreach Impact

異なる学術分野への展開や社会的・経済的価値の創出などのインパクトをもたらす研究を評価する軸

### 汲集性

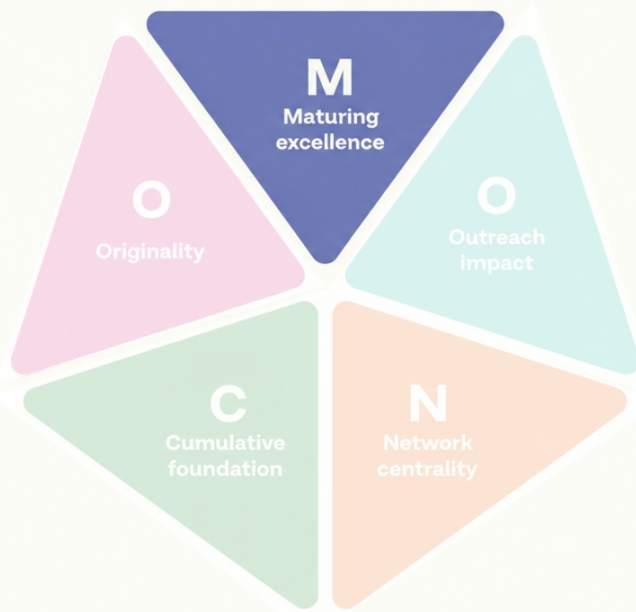
Network centrality

学術ネットワークの中心を築き、社会の人々と学術を結びつける求心性を持つ研究を評価する軸



## 5軸で表される研究の価値

- 各研究組織が、5軸を自らの文脈で定義。そのうえで、10年後どうなっているとよいか、展望を描く
- 分野ごとの多様な価値を可視化
- 研究の価値を語るための共通言語に



### 伏流性

Maturing excellence

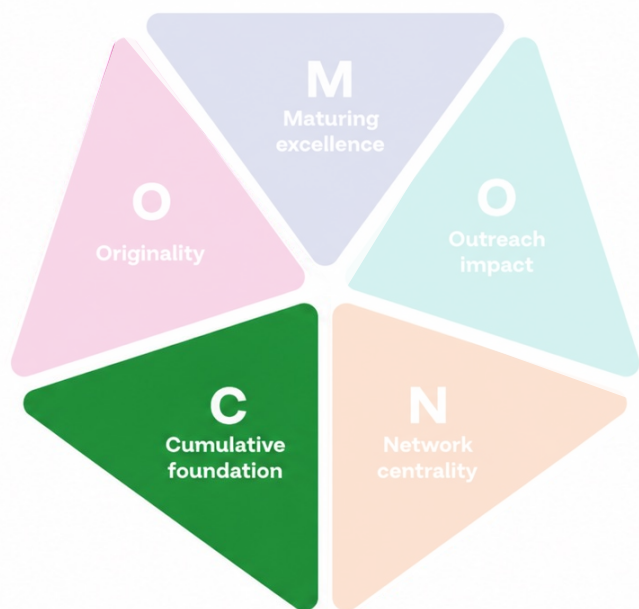
現状では成果が可視化されていない潜在的で  
ユニークな研究を中長期的な視点で評価する軸

顕在化した成果の有無に関わらず、不確実性を伴う挑戦的な研究を評価の対象とするとともに、そのような研究が継続的に生まれ、受容されている研究環境や組織のあり方も含めて捉える



## 5つの軸で表される研究の価値

- 各研究組織が、5軸を自らの文脈で定義。そのうえで、10年後どうなっているとよいか、展望を描く
- 分野ごとの多様な価値を可視化
- 研究の価値を語るための共通言語に



### 積層性

Cumulative accumulation

学術知の蓄積により、知を確実に継承していく研究を評価する軸

例えば、人工衛星による長期的な地球観測データの蓄積や、大型実験装置の継続的改良によってはじめて到達可能になる発見を生み出す営み、古典文献の解釈の積み重ねを通じて、時間の中で進化する知を創出する営みなど



## 指標より先に、価値を言葉にする

価値と展望を  
描く

何を大切な研究価値と考えるのか  
10年後にどのような姿を目指すのか



変化の確認  
方法を考える

その価値が10年後にどのような状態と  
して現れていてほしいか  
その変化はどのように確認ができるか



展望を実現するた  
めの取組を考える

展望の実現のためにはどのような  
環境が必要か

対話 / フィードバック / 見直し

価値を言葉にし、対話し、試し、足りないところは大学が支援し、仕組み自体も評価し、  
また次の10年を展望する。

# COMON



## 運用の原則案

研究評価公開シンポジウム「＜COMON＞とは何か：多様性と持続可能性を支える未来への挑戦」  
(2025年10月開催)での議論を経てウェブ公開

### 1. 協働と信頼の基盤

多様な主体が信頼し合い、成果だけでなく協働を評価し、京大独自の知を育む基盤とする。

### 2. 絶対評価と挑戦の重視

序列化や分野間比較をしない。デパートメントごとの戦略と達成を正当に評価する。失敗を恐れない挑戦を促す。

### 3. 深い価値の理解と共有

異分野の知を尊重し、対話でその意義を共有し、多様な知の価値を公正に認める枠組みを整える。

### 4. レジリエンスと循環

若手が積極的に計画づくりに参画する。人材と知の循環により未来を切り拓く持続的環境を築く。

### 5. 大学文化の可視化と発信

多様な研究を可視化し、京大独自の知と文化を発信して、世界の学術を豊かにし、新たな展望を拓く。

### 6. システムの効果の把握と改善

この原則を踏まえ、制度を絶えず改善し、協働と挑戦を支え時代に応じた知の価値の実現に貢献する。

## 4. これからの課題・未来に向けて

# 多様性を尊重しながら、大学として共有できる価値はあるのか

## Value capture

測定可能な尺度や指標に身を任せると、それがいつの間にか「価値そのもの」「目標そのもの」へ置き換わっていく。

= KPIに合わせて価値を語る



## Value federalism

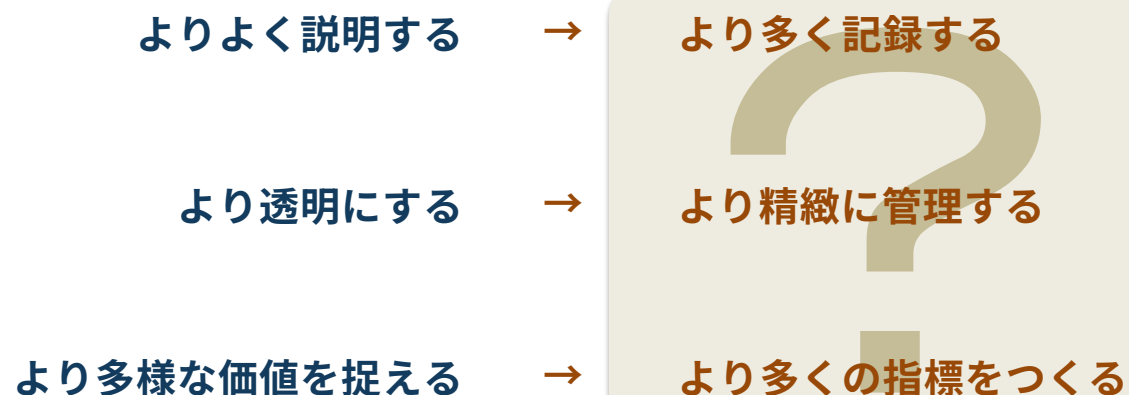
多様な価値を一つの尺度へ還元せず、それぞれの文脈を保ったまま共存させる。連邦を連邦たらしめる共有する価値の表現方法が、COMONの5つの価値と言えるかもしれない

= 5軸を各組織が自ら定義する

測りやすい価値に、自分たちの価値を明け渡さず、残したい価値に収斂させていく

Nguyen, C. T. (2024). Value Capture. *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 27(3), 469–510.  
Sigurðarson, Eiríkur Smári (2025). Evaluation, Societal Impact, and the Humanities: Reflections On Value And Agency. [https://vastuullinentiede.fi/sites/default/files/2025-05/RESSH2025\\_Conference\\_Book\\_of\\_Abstracts.pdf](https://vastuullinentiede.fi/sites/default/files/2025-05/RESSH2025_Conference_Book_of_Abstracts.pdf)

## これからの課題： 評価改革そのものが、新しいAudit Cultureを生まないか



すべてを透明に公開することが良い評価・良い価値をもたらすわけではない。  
価値を共有するためには非公開の場での議論に基づく信頼関係が重要になることも

↓  
バランスを見ながら繰り返し修正

## 測定の解像度が上がることと、価値を深く理解することは同じではない ＝専門家としてのURA、研究マネジメント専門人材の役割

図書館員／  
学術情報分析

研究IR

インパクト  
マネージャー

URA

研究広報

AIエージェント

もっと測れる

≠

もっと分かる

専門職の役割は、測定を精緻化し、求められた情報を正確に提供することだけではない。相手が求めるものの背後にある思いを理解し、光の当たらないところにある情報や視点を持ち込み、研究者・研究組織自身が考える過程を支え、ときにはともに一緒に考えることも必要。

# 何を評価し、何を残したいのか

## 評価は、価値を測るだけではない。

評価基準は、何を研究し、何を成果とみなし、どのような研究文化を次世代に残すのかにも関わる。

### 多様な価値を、単一の尺度に還元しない

研究の価値は分野や文脈によって異なる。一方で、大学として共有し、守り、育てたい価値を言葉にすることはできる。

*Value federalism (Nguyen 2024)*

### 「よりよい評価」も、それ自体を問い直す

多様な価値を捉えようとして、記録・指標・説明責任を増やせば、新たな監査文化を生む可能性がある。透明性や測定の精緻さが、そのまま価値の深い理解を意味するわけではない。

*Shore & Wright (2024); ミュラー(2019)*

### 価値判断を、対話と実践のなかに取り戻す

研究者と専門職が、何を大切にするのかを言葉にし、異なる視点を持ち寄る。評価される側も評価の仕組みにフィードバックを返し、システムを共創していく。

何を価値とするかという判断を、測りやすさだけに委ねず、対話により問い続ける  
そしてそのためには、対話し共有できるコミュニティの存在が重要

# IRコラムシリーズ：【研究力分析の現場から】

[ホーム](#) > [トピックス](#) > 【研究力分析の現場から 第0回】京大の「研究力」って、結局なんなの？

**【研究力分析の現場から 第0回】京大の「研究力」  
って、結局なんなの？**



<https://www.research.kyoto-u.ac.jp/blog/research-metrics-00/>

**【研究力分析の現場から 第1回】被引用数から見え  
てくるもの——「Q値」ってなんだろう？**

数値の限界を

**【研究力分析の現場から 第2回】実績（エビデンス）によって、未来は描けるか？——数値の限界を「余白」と捉え、自らの価値を再定義する**

指標誤用の零度—

**【研究力分析の現場から 第3回】インパクトファクターの正体 —研究力分析指標誤用の零度—**

自分たちのリテラシー  
向上のため、  
勉強しながら  
KURAの同僚と交代で  
書いてます。ぜひご意見・ご感想お寄せください

# Community of Practice

## 日本

2025年～

研究・イノベーション学会  
研究評価改革ワーキンググループ

「責任ある研究評価へ向けた研究機関  
向け実践ガイド」の共同翻訳の実績も

<https://sfdora.org/2026/06/01/insights-japan/>

ワーキンググ  
ループのメン  
バーで  
分担して翻訳



## アジア・太平洋

2026年6月

インド、シンガポール、オーストラリ  
ア、ニュージーランドなどから大学、  
資金配分機関などで研究評価改革に  
関わる関係者が集まる

<https://sfdora.org/2026/06/24/rra-apac-singapore/>

## 日本／グローバル

2025年3月～

リサーチアドミニストレーション（RA）協  
議会内での呼びかけにより「**研究評価勉強  
会**」が発足し、責任ある研究評価の国際的  
な推進を担う「研究評価グループ(REG)」に  
日本チームとして参画。REGは、研究マネ  
ジメント団体の国際ネットワーク(INORMS)  
のもと、研究評価のためのSCOPEフレーム  
ワーク等の設計など行ってきた組織。なお、  
REGの活動は2026年8月に新たなグローバ  
ル枠組み「REGA」へと継承された。



<https://re-ga.org/>

実践コミュニティが広がり、相互の情報交換ネットワークができつつある

## まとめ

### ■ 1 | 研究評価は、研究の価値を測定するだけでなく、価値形成にも関与

評価基準や指標は、政策から研究者個人まで複数のレベルを通じて行動に作用する。何を評価するかという選択は、研究の価値を捉える枠組みとなり、ときにValue Capture（価値のすり替え）を引き起こす。

### ■ 2 | 評価対象も、「成果」から研究を生み出す環境・条件へ広がっている

グローバルな研究評価改革では、指標を全面的に否定するのではなく、定性的判断を中心に据え、多様な研究成果・活動・研究文化を適切に認識する方向へ。大学レベルの取組では、研究環境や組織の強み・課題を振り返り外部との対話を改善につなげる形成的評価が重視されつつある。

### ■ 3 | coMONは、大学自身が「何を価値ある研究と考えるか」を問い直す試み

研究組織を単位として、5つの軸を各分野の文脈で定義し、10年後の展望を描く。分野ごとの多様な価値を可視化するとともに、大学として研究の価値を語り、対話するための共通言語をつくる。

### ■ 4 | 評価の仕組み自体を問い直し続けることが、研究文化をつくるのでは

何を価値とするかを測りやすさだけに委ねず、研究者・専門職などが異なる視点を持ち寄り、対話と実践のなかで問い続ける。そのためには、異なる価値を共有し、ときに異議を唱えられるコミュニティが重要。そこからのフィードバックを評価の仕組みに返し、継続的に見直していく。

ご清聴ありがとうございました。

# 一緒に作ってくれる仲間を募集中です！

**【募集中】総合研究推進本部URA：リサーチ・アドミニストレーター（特定専門業務職員）の募集 | 研究プロモーション・企画推進（令和8年10月18日締切）**

---

## **【公募要項：研究プロモーション・企画推進】**

**対象職務：研究支援、研究IR、企画立案・共創デザイン、国際連携、若手研究者育成、研究広報、研究推進・対外戦略、研究DX、研究インテグリティ**

国際卓越研究大学のビジョンを実現するため、研究力強化を牽引する総合研究推進本部において、研究推進プログラムの企画・実施や研究者・研究プロジェクトの支援、各種基盤の構築に取り組む専門職、リサーチ・アドミニストレーター（URA）を募集します。

URAという新たなキャリアに挑戦する方、また国内外の大学においてURAまたはURA類似職の業務経験のある方

## 参考文献・参照資料

- Waltman, L., et al. (2026). *From interdependent movements to shared action: Connecting publishing and assessment reforms*. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.22133868>
- Shore, C. & Wright, S. (2024). *Audit Culture: How Indicators and Rankings are Reshaping the World*. Pluto Press.
- Koley, M., Rafols, I. & Yegros, A. (2024). Metascience can transform Indian research. *LSE Impact Blog*, 8 Nov. 2024.
- Kumar, A., Koley, M., Yegros, A. et al. (2024). Priorities of health research in India: evidence of misalignment between research outputs and disease burden. *Scientometrics*, 129, 2433–2450. <https://doi.org/10.1007/s11192-024-04980-x>
- Nguyen, C. T. (2024). Value Capture. *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 27(3), 469–510.
- 日本学術会議若手アカデミー (2023). 『回答：2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題』 . <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-k230926-4.pdf>
- Springer Nature (2025, April). *The state of research assessment: Researcher perspectives on evaluation practices*. <https://stories.springernature.com/state-of-research-assessment>
- 科学技術振興機構研究開発戦略センター (2026). 『研究評価の国際動向』 (CRDS-FY2025-RR-04) . 国立研究開発法人科学技術振興機構. <https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2025/RR/CRDS-FY2025-RR-04.pdf>
- Curry, S. et al. (2020). The changing role of funders in responsible research assessment. *RoRI Working Paper*, No. 3.
- Hicks, D. et al. (2015). Bibliometrics: The Leiden Manifesto for research metrics. *Nature*, 520, 429–431.
- Wilsdon, J. et al. (2015). *The Metric Tide*. HEFCE.
- 西岡千文 (2026). 研究文化の評価 —REF 2029をめぐる人材・文化・環境の評価の試行と再編—. 『情報の科学と技術』, 76(3), 150-153.
- Yates, E. & Leeming, J. (2026). UK universities are on the brink — what is their greatest source of stress?. *Nature*. <https://doi.org/10.1038/d41586-026-02608-z>
- VSNU, NFU, KNAW, NWO, & ZonMw. (2019). Room for everyone's talent: towards a new balance in the recognition and rewards for academics (Position Paper). <https://www.nwo.nl/en/position-paper-room-for-everyones-talent>
- Universiteiten van Nederland, et al. (2020). Strategy evaluation protocol 2021–2027: Protocol for research quality assessment in the Netherlands. [https://storage.knaw.nl/2022-06/SEP\\_2021-2027.pdf](https://storage.knaw.nl/2022-06/SEP_2021-2027.pdf)
- Universiteiten van Nederland, et al. (2026). Strategy evaluation protocol 2027–2033 [v6]. <https://www.universiteitenvannederland.nl/files/publications/Strategy%20Evaluation%20Protocol%202027-2033%20v6.pdf>
- ミュラー, ジュリー・Z. (2019). 『測りすぎ：なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?』 (山田文 訳). みすず書房.
- Sigurðarson, E. S. (2025). Evaluation, Societal Impact, and the Humanities: Reflections On Value And Agency. *RESSH 2025 Book of Abstracts*, [https://vastuullinentiede.fi/sites/default/files/2025-05/RESSH2025\\_Conference\\_Book\\_of\\_Abstracts.pdf](https://vastuullinentiede.fi/sites/default/files/2025-05/RESSH2025_Conference_Book_of_Abstracts.pdf)
- 朱喜哲 (2026). 『バラバラな世界で共に生きる—リチャード・ローティの哲学』 . NHK 出版新書.
- 佐々木結, 仲野安紗, 橋爪寛, 藤川二葉 (2026). 大学における研究評価の主體的な再設計：京都大学の研究評価システム「COMON」の設計思想と導入プロセス. 『情報の科学と技術』, 76(7), 319-324.